

三代目が「もがく過程」を肯定した日

港区倫理法人会 大沢 豪 副事務長

——自己変革から始まった、継承と再生の物語

「倫理の『り』の字も知らず、興味もありませんでした」。大沢豪さんの入会は、知人からの熱心な誘いに応えたものでした。学びへの関心は薄かったものの、この縁をきっかけに後継者倫理塾（以下、後継者塾）19期への入塾を決めます。

大沢さんは税理士の家系に生まれましたが、仕事一筋の親に反発、定時制高校に通いながら、工事現場で重量鉄骨を担ぐ日々を送ります。卒業後、転職したアルバイト先の日焼けサロンで店長になる誘いを受けた時、23歳で初めて将来を考え、「スーツを着て仕事をしたい」と、税理士の母を頼ります。提示された「簿記2級取得」という条件を専門学校に通い突破、29歳で税理士試験に合格。さらに大学院でも学び成果を上げ、今の自分があるのは100%自分の努力によるものだと確信していました。

やがて事業継承後、理念研修を担当する南山氏(霞が関倫理法人会 会長)から「お母さんに手紙を書いたほうがいい」と勧められましたが、衝突が絶えない母に対し「書けない」と断りました。しかし、後継者塾での学びが心を溶かしていきました。富士高原研修所(富士研)で書いた母への手紙。男社会の税理士業界、女手一つで家庭と仕事を支えるため、強くならざるを得なかった母、そして多くの顧問先を引き継いでくれたこと、「ようやく理解して、申し訳なかったなと思って、ようやく自分が変わった」と述懐します。

心の変容は、周囲との関係を静かに変えていきます。以前は「とにかく結果を出せ」というスタンスでしたが、自身の歩みを肯定できたことで、「もがくことが大切なんだ」と子供たちの過程を尊べるようになったのです。富士研から帰宅後、大沢さんは課題で書いた妻への手紙を渡し、自身が書いた母への手紙も見せました。そうした大沢さんの姿から、奥様は夫の決意を汲み取り、その思いを娘さんに話したのでしょうか。「柔らかくなった」変化を間近で見ていた大学3年生のご長女が、昨年末に「税理士ってどうやったらなれるの?」と問いかけてきました。娘さんは年明けから簿記学校のコースに入っています。

変化は事業にも及びました。「一線を引いた関係でいたい」という方針は維持しつつも、「因は我にあり」の自覚から、社員のミスを責めず「自分のフォローが足りなかった」と捉えるようになりました。経営者の心の在り方が変わったことで、職場の空気は明るくなったといいます。



大沢さんは後継者塾を最高の入り口と呼びます。100日実践、家系図作成、法人スーパーバイザーや法人レクチャーによる講義、そして『万人幸福の葉』を読み込みアウトプットすることで、理解を加速させるからです。「塾で深く学ぶからこそ、モーニングセミナーの話が入ってくる。そうでなければ、意味もわからずやめていたかもしれません」。

「今あるものは自分で得たものと思っていたけれど、そうじゃなかった」。自らの歩みを家系の流れとして受け入れた三代目は、今、次代へのバトンを握っています。